

「私」という存在としての判断力

関 谷 真^{*1}

要 約

あらゆる人間事象には、「私」が主体者として存在する。この「私」は自我でも自己意識の場としての存在という意味ではなく、むしろ、それらの意識の根底に現れる主体者という意味である。

「私」は、関心と配慮の及ぶ方向に開かれた世界を持っていて、その世界は他者と関わる自分自身を含んだものである。これを「私」の地平 (horizon) と呼ぶ。この世界には価値として人が選択した事象が具体的に実現され、関わり合った複雑な纏まりとして現れる。善なる方向への意志を持ったものである。

人の価値選択は、行動として現れるとき意志の力として現れる。従って、世界が善の方向に向かって、人間の福祉の状態を目指し、かつ、それを実現するのはこの意志の力とあってよい。この意志の力は、判断基準 (規範) に依って価値判断しながら選んだ価値実現を推進する。

社会システムはそれ自身の法則によって自律することだけでは維持できない。そこでは、しばしば人のコミットメントの力の働きが要請されるのである。

はじめに

脳死論議のように決着が付きそうでなかなかその結論まで達しきれない倫理問題がある。脳死・臓器移植に関する法律が成立しているとしても脳死を人の死とするか、また、臓器を提供するかは一般法則のようには律することが出来ない。それは、「私」という個がいるからである。そうした私が脳死をどう受けとめるかについては他者が自分の考えを強制できない。ここで言う個は、個人主義の方向を持った個でもなく、また、共同の和のなかで何となく一致する方向に共に動く社会のなかの個でもない。如何なる状況にあっても存在する人間の根底に現れる「私」である。自分の価値観や人生観を人間は如何に獲得するかを問わないこととして、この「私」は行動の選択の力として働く判断力と判断基準となる規範 (明確に言葉に出来るものとは限らないが) を持っている。

生きている私があって、死ぬ運命にある私があって、そうして死に対する考えがあり、そのところに人の死と脳死の事象が現れてくる。勿論、実際に脳死の人に出会った経験もなければそのことについて聴いたこともないと、その「私」にはそれらのことは何も現れてこない。そういう私は、経験で知っている死については語れるが、脳死については何も

対応する現実がない。

ところで、脳死という現実是一般の家庭という場では判断の仕様が無い専門的な判定基準があるので、例えそれが個人の死であってもそれを一般の人々が認知する方法がない。勿論、今までの「三徴候モデル」に依っても最後の死亡診断は医師が行っているものであり、その点では同じ経過ではあるが、しかしながら、従来、人の臨終は悲喜こもごもながら誰の目にも「不帰の人」になったという実感と現実が明らかかなところがあった。脳死という死は、結局、医療専門家集団としての病院という組織が社会体制としての制度のなかで脳死を判定しているのであり、はっきり言ってしまえば制度のなかで死があり、さらに臓器移植と連携する場合には、その医療行為は制度としての連携組織が法的で倫理的配慮を規定として据えて実行しているのである。

インフォームドコンセントについても同じことで、この医師—患者関係の形式は専門家集団に属する医師たちとの関係と見なすこともできる。一方で、医師—患者関係の臨床的な個人と個人の関係にも通じる倫理的規範となっている。ある病院に属する医師がこの形式を守らなければその病院の倫理的方向性は疑われるし、病院自体にインフォームドコンセントに対する認識が薄ければ、その病院に属する医師

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 関谷 真 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

にその規範への強い関心があつて実際に実行していても、病院体制全体としては現代的倫理にはそぐはない。その医師は矛盾を抱えるに違いない。

社会体制や制度はそれ自体が考察の対象になり、われわれの生活一般に国家や地域行政単位でも問題にすることが出来るのであるが、この論文ではこの領域の考察を省略している。そうではなく、社会体制としての政策や法律の制定、また、やや観点は異なるが職業倫理と呼ばれる専門家集団の倫理規範などを創り出す集団の中の個人を人間論的に問題に据えているのであり、むしろ、これらの制度や職業倫理規範の奥に潜む人間の実存的根拠を探求することを目指しているのである。脳死・臓器移植問題に見られるように、法律に則って死体臓器移植が実施されてもドナーと臓器の受容者、またその家族の承諾なしには、移植医療が如何に技術が優れていても、かつ法的手続きが完璧であっても、実施できない。この様な状況では医療体制レベル、また、家族と患者のレベルでも葛藤とディレンマが起きやすい。このときに判断力が判断者の価値観で決まってくるのである。このときに「私」という主体者が存在するのである。これは、ひとまず私は個人であろう。しかし、病院という医療体制も体制全体は主体と見なしうるので「私」であるといつてよい。もっと広く取れば、判断がなされるときには必ず「主体者」が存在するという意味である。そこで、論を展開する場合には人間個人にひとまず「私」という身分を見いだして、その「私」なるものを主題とし、判断力の性質を考究する。

方向としての善

善という事象は価値判断を含んだ人間の判断に沿った事象である。従つて、厳密に言えば、善なるものはそれ自体として存在しないとも言える。一般に真、善、美といわれる事象はそれ自体が存在するものではない。そのために人間は価値判断の違いによって具体的な事象についての真偽判断、正・不正判断、美的判断内容が異なってくる。その異なりがあまりに違つてくると意見が分かれることになるので、ひとまず事実問題に人は退避する。事象としての現象に戻るといふことである。しかしながら、純粋に現象的で事実として与えられる事象があるのかという問題が生じる。この問題は大問題だから今の所解決はない。

そこで、われわれは自分自身の活動に伴つていつでも判断力が働いていると考えることにしておきたい。そのために目的や結果についてわれわれは評価をしながら物事を判断しているのである。このこと

は普通に当然のこととされている。それにつけ加えておけば動機という主観的な行動の起動力を加えておくことが出来るかも知れない。この判断力は現象に過ぎないのであろうか。しかし、われわれの判断力は力として働いて自分の行動を決定している。ことを分けることをわれわれは実行している。

進化論は自然科学の理論だと思われている。実際にその通りであるが、科学の哲学では進化には目的性があるかという難問がある。一方で、偶然の変移を繰り返すことだけであつて、その変化のなかに生存価を持つ適応度の高い種が残つたのだという考え方もある。科学的にはどちらにも決めることは出来ない。現代科学は目的論を排除する傾向にある。

それにも拘わらず、目的を想定したり、結果の評価をして自分に有利なことを選択したり、世界に法則を発見したり、自分の生き方を自分で決断することによってその結果にも責任を自分で負つたりすることは人間だけが実行していることも分かっている。従つて、人が死ぬ、ということは身体機能や組織の崩壊ということだけではないとわれわれは感じている。これも当然のことである。それでは、人が死に至るといふことと、「私」が死ぬといふことは同じことなのであろうか。

ここに挙げた多くの問題は「見えないもの」が「見えるもの」によってどう現れてくるのかという問題に帰着する。見えるものによって現れてくる限りにおいて見えないものが存在するといふことは何であるか、という問いである。神の問題はその点では難問である。魂の問題も同じである。

ここでもう一度、科学的思考法に戻つておこう。科学は観測可能なものに限つて学の対象とする。量的に測れるといふことである。更に、要素に還元されてもあくまでもその要素は「もの」として存在する必要がある。ところが、いのちはどうだろうか。生きているといふことはどうだろうか。要素に還元できないことはない。しかし、それがいのちとは考えられない。生きているといふ現象は要素が単に法則的に連関してある現象を創発しているといつたとしても、生きていることを言い尽くしているだろうか。ある人が明日も生き続けるといふことを誰が保証するだろうか。健康であれば大体は明日もうまく過ごせるだろう。しかし、全てが決まつたようには世の中が動かない。互いに信頼はしていても思いがけない攪乱も状況のなかに侵入してくる。

科学は、特に現代科学は観測可能な現象を対象を持っているが、生きることとか「私」、また、善なることといふようなことを対象とする場合には、観測可能な量では測れない対象を問題にすることにな

るであろう。

もう少し込み入った言い方をすると、生きることとか「私」という人格としての存在、善であるできごとというのは時間の流れのなかで実現されて行くものである。法則に従って（例えそれが確率的であっても）ある一定の観測に乗る事象は、時間のパラメータを持ってはいるが、その場合にいわれる不確定性は人間の意図の変更のような偶然性とは違っていて、確率的で予測不可能なことで自体が現象の法則になっているということである。しかし、人間が互いに信頼する意図的な生活現象は裏切りが不確定要素になっているのではなく、信頼の持続に不安をもつとか、希望を持つとか、人を信頼しない性格であるとか、様々な確定できるはずもない人間の意図に焦点がある。信頼の持続への意志がことの成りゆきの先の将来を確定しているのである。従って、人間生活での不確定性は人間自身の意図の持続に対する意図変更という意味で、科学的な法則性とは違った不確定性である。むしろ、信頼は裏切りに出会う可能性もあるという不確定性を前提にすること自体が信頼という意図的志向には禁物である筈のものである。

善であることは力として働く。それは、方向を決めて、人間が価値と見なしたものに人間の意図という力を加える対象である。それ故に、意図としての力によって善の実現が持続することになる。善であるできごとは、人間が持続を欲求しそこに力を加える意図を獲得して価値として人間が認めるときに現れてくるものである。そのために、善の実現が目的という様相を持つのである。生命の尊厳を守る、という言い方にはそのことがはっきりと現れる。尊厳性を生命に認める力は人間にあるし、その意図を力として持続させるのも人間であって、人間がその意図を失えばその生命の尊厳は立ち消える運命にある。人権の思想も同じである。

力としての「私」

善であるできごとが如何にしてわれわれのなかに現れてくるかを前節で考察した。そこでは人間の意図という力を引き出した。意図には意図する者としての主体者が存在する。それが「私」であるといっただけよい。前に述べたように主体者は国家のような組織でもあり得るが、ここではそれを除外しておく。組織について一言だけつけ加えておけば、組織は構造的機構でシステム的に取り扱えるものであるが、人間の作る組織は達成する目標とその達成のためのプロセスがその組織に属する人間によって維持されているものであるから、その属する人々の個人的な意図が組織の持続にとっては大きな原動力になってい

るということである。その上に、組織自体の全体が組織持続の方向として善に意図の力を持っていないといけないであろう。従って、組織を個人に還元して取り扱う必要はないが、一人一人の人間の「私」を考察の出発点としてここでの「私」を取り上げたい。

私とはどのような存在なのかという問題は近代の哲学での主題である。当然のことながら、私という存在が今も昔も存在しているわけであるから、今更に取り上げてことさら議論をすることはないともいえる。それ故、このことを特に考究する理由などない、と考えても一向に差し支えない。自分が行動し、時に人と対立したり、協力したり、ことを見過ごしたり、ひたすら自分の出来ることだけを行ってればよいのだといえなくもない。そう決めてしまえば特にこの問題に関わることも必要ないのである。

ところが、いったん「私」というこの存在に目を向けると気になることも多くなる。その場合には、いつでも他人からどう見られているのかとか、人付き合いが下手な私だとか、仕事が嫌いでも本当に自分の好きなことがないのではないのかとか、自分の生きる周りの環境が自分には全くそぐわないとか、いろいろなできごとのなかに自分が現れてくる。このときの自分は、大体において、自分が日常で巻き込まれている現実の状態とともにありながら、それとは別に日常の自分を支えている私という根本にある「現存在」としての私が現れてくる。

この私は、決して現実の現象としての私と離れることはない。それにも拘わらず、「自分らしくない」自分が日常に存在しているかのように実感する。このことを自分というものが私から遊離していると感じることがほんとうにあるのかどうかは、ここでは深くは論じることはしないでおこう。しかし、ヘーゲルはこの様な自分を「自己疎外」された自己として人間の精神の現実と見なして、人間の現実的な変化がこの矛盾の解消として次の私の可能性の展開の原動力になっていると考えている。通俗的な言い方をすれば、「自分の思っていることは実現する」ということになるのかもしれない。この様に自分を信じ切ってしまうこともできる。

どのような状況にあっても、どのような構えを持っていても、何を心の中で考えていても、如何なる思いが自分のなかに起こっていても、「私」は空の箱ではなく、明らかに自分としての内容を持った私であるとしてよいであろう。お菓子箱のようにそこに詰められた菓子の種類によって名前が付けられているというほど単純な存在であるわけでもない。そのことをどのように言えばよいのだろうか。「あるようにある」と言うことであろうか。旧約聖書の中の物語

のなかで、モーゼが神とシナイの山中で神と出会うときに、神が自らを「ありてあるもの」であると告げたという。この言葉は、あるようにある人間のありように「神の似姿」を見るキリスト教の思想のなかで重要な意味を持っている。というのは、存在するものの充実としての神がそこにあるからである。そこには自己疎外と言うこともない充実であるということになる。

「私」と言うことを取り上げたとしても、それが直ちに個人主義を意味することはない。個人間の競争主義を勿論意味しない。そういうことではなく、現実の人間の政治体制、経済体制、規範的な人生観や価値観が如何様であっても、社会の法律体系が如何なる原理や規則によっても、それらの具体的な現実のあり方が人間としての私から可能性の実現として生じてきていることをもう一度見直しておく必要があるということである。社会をシステムとして合理的に操作することはそれが人間的であるとは限らない。システムの思考は一つの発想に過ぎない。言わずもがなのことであるが、システムで人間を縛る権力的支配構造などは論外である。システムは人間が利用するものである。

私は何処でもいつでも具体的現実の基底に存在する。この私が人間存在の根底にいるのである。「自我」があるかないか、自己意識とはどのようなものかという問題はあるが、その底にある私のことをここでは指している。私とは何かと言うことである。私を全て理解しきることはないであろうが、私が全体として包括的に活動している存在であることは了解できる。従って、自分のなかで考えが矛盾し合う状況とか、周りに動かされ過ぎているとか、生きる目標が定まらないとか、自分を見失っているとか、様々な錯綜が私にはあるということも起きる。それでもそうになっている自分が私であることには変わりがない。私に代わる自分はいない。

ここで言う「私」に自我という哲学的な意味も持たせる必要はない。同じ人間であるならば誰でも「私」であって、それだから、また、「私でない人」についても配慮をする実存的私でもあるのである。自我と他我などと言う区別を初めから持つ必要はない。私でないひとりが全く私のような実存性を持たないと言うような僭越なことは出来るわけがない。かえって、私でない存在の方が優れているのかもしれない。私が痛みを感じるという場合に非常に主観的で他人には理解できないとか、他人の痛みは私には理解できないと言う議論もあるが、「私でない人の痛み」は、むしろ私の痛みより酷いのもかもしれない。ただひたすら分からないと言うのでは、互いに関わる人間の

実存の深みはなくなるのではないだろうか。私の痛みは、他者の痛みではないと言うことが、他者の痛みはわからないから他者には痛みがないのと同じというのでは、論理的な形式からしても全くおかしな飛躍である。

「私でない」と言うことは「私」が成立すれば直ちに生じる言い方である。何も不思議ではない。私でないものについては何もわからないと言うのは徹底した自我論である。無理に徹底する必要などない。ただ、実際に自分の他に存在する他者は私と関わりがあることは確かであり、その影響が私にとって如何なるものかは予め予測も、確定もできない。

私とは何かという大きな主題を哲学的な考察の対象にすることもできる。しかし、ここではそこまで踏み込まない。実存としての私を考えようと思う。その実存的な私の配慮と関心を持つ眼差しの地平に現れてくる世界は、私自身も含めて他者も存在し、互いに関わりを持つのである。それ故、ここでは単純に世界は私を含んだ関わり合いの中の私と他者とだけ言っておいて、それ以上踏み込んだ議論はしない。それに加えて、自分という私は他者との関係のなかで自分が分明になって来るという視点も大事である。自分を含んだ世界なしには自分という私は私に明らかになってこないと考える。

従って、私の実存性が基本的に如何なる基底としてあるのかが問われるわけである。実存の根底を問うという場合の実存の根底の意味は、人間としての活動の意味を問うことである。即ち、行動する人間は現象として見れば、歩いたり、笑ったり、ものを作ったり、話したり、じっと考え込んだりなどの活動をするのだが、それらが人間的であることをどう認めるか。如何に人間的であるかというための根拠を知ることが出来ればよい。勿論、人間として生まれるのであれば自発的な行動は自ずと人間性を示すに違いないことは明らかである。それにも拘わらず、人間性の根底を探求する理由は、共感する人間の相互の配慮を日常の活動のなか創り出す基盤を知るためであろう。個人としての個を大切にすることも、そのことが相互の人間の連関を無視することを意味しない。即ち、倫理的な人間の関係が人間の配慮と関心の及ぶ自分自身を含めた世界のなかの実現するその基盤について知ることである。

私という存在は可能性を実現して生きる自己実現をする。自己実現の内容は世界のなかで現れ、世界を形成するのである。それ故、世界という場は時間とともに過去、現在、将来、未来という方向を持っている世界である。私も、また、同じように生きているのである。

医療の世界、癒しの世界、日常の世界、あらゆる人間現象は世界を造っている。明確に言えば、世界が癒され、世界が生活をしていると言ってもいいのではないだろうか。癒すものと癒されるものという区別は、いはば、人間の相互関係のその場の立場の違いだけで、癒されるのは相互の関わりの中ではなくとも癒されている世界がそこにあり、癒す世界がそこにあるという見方もできる。癒しの場合という言い方があれば、それはその場がその場に参加している人が医師であれ、看護婦であれ、患者であれ、癒される可能性が期待されるそういう場の世界のことである。

私には自ずと私の地平があって、それが世界になっていて、しかも、私自身もその中に含まれながらその世界の場には他者が存在する。従って、関わりの中である。その私が自我としての私であるかという問題は直ちに問題とならないのかもしれない。しかしながら、まず始めに、私を含んだ世界のなかの他者との関係が人間性を基礎としているかどうかは問題になるであろう。そして、それは人格の問題である。

結論として、「私」は、倫理的であり、実存的であり、人格的であることを根底として関わりの中を持つ活動の主体であるといつてよい。

世界から世界へ

世界とは、人の精神内部にある自分を含めた世界と自分を含めた現実具体的な実際生活の現場として関わる世界を全て含めている。内部世界と外部世界という区別も可能であるが、しかし、自分をその世界に含めているということからその区別は主観的客観的の区別という区別ぐらいの区別は出来る。しかし、内部世界と外部世界とは人によっては一致するだろうし、ある場合にはその不一致がかなり大きいこともあり得る。人間の想像力は内部世界を外からの継続されて入ってくる知覚から独自の世界を形成することが出来るようである。その意味では内部外部の区別は出来るが、世界という広さは単に内部と外部の足し算ではないであろう。世界はそれ自体人間に関わる全てである。ただ、現実の具体的世界は今この場のその世界である。

人間の可能性の広さだけの世界の広さがあることになるのである。可能性は無規定で未定で未知であるが、現実的具体的世界はある程度の規定性がある。その規定性は人間の所産としての世界形成と深く関係していて人間の世界であるともいえる。人間が本来可能性として自由でありながら、規定のなかで現実を生きている。

規定性と規範性の世界は不変ではない。規範性と

規定性を持つという現実世界は、変わらないのではなくその様な所与を持つことは普遍的であるから、変わることも普遍的な現象である。われわれが生産する世界はわれわれのものである。従って、われわれは理解できるはずである。理解できるはずではあるが、しかし、人間の実存的なあり方にそれがしっくりこないときには、不都合があると人は感じるだろう。従って、それを乗り越えようと人間は努力をする。変革はそうして起こってくる。

規定性として現れる世界は、しかし、纏まりとして現実の世界であるが、その世界は複合的な事象の纏まりである。複合的というのは、矛盾もあり、意見の対立もあり、多様な考えの並立でもあり、人間の所産のさまざまなものを含んでいながら一定の規範や規定性のなかで日常が進んでいて生活が営まれるということである。

規定性は纏まりであるから、一つの像をもっていて、それによってわれわれは包括的な理解を元とした世界理解が出来る。包括的理解に基づく纏まりということは、纏まりとしてはその中に含まれる概念や制度などが普通は互いに矛盾のないものであるように出来ている。ところで、纏まりとしてのその規定性はそれ自体が直ぐにその否定形を持ちうる。形式的にそれは成立する。しかし、この否定形はその二重否定が元のものには戻らない性質のものである。

「白鳥である」ということに対して、直ちに「白鳥でない」は成立する。しかし、否定をさらに否定しても元の「白鳥である」には戻らない。というのは、「白鳥である」ということは包括的全体理解として、いくつかのカテゴリー的概念に従って見いだされている特徴に分節されているか、あるいは、分析されている要素の集まりであるから、それを否定している否定形の内実は別の内実であるので、その全てが白鳥の一つ一つの分析された特質とは別のものがあり得る。「白鳥でない」ということは、全然別のものとしての纏まりをいっている可能性が大きい。従って、「白鳥でない」ことを二重否定しても「白鳥である」には戻らないわけである。

「白鳥は白い鳥である」として、白くない鳥は白鳥でないといったとしよう。ところで白鳥の特徴は体色が白だけではない。従って、白いことだけで白鳥が決まっていけないに違いない。他の白鳥の特徴があったとしたらその特徴のとともに白い体色がその特徴のなかに数え上げられていない場合には、白鳥であるか否か決まらないのであろうか。ある人は、これだけ白鳥の特色があるのだから、体色も白いに違いないというかもしれないし、これだけ特徴が数えられていても体色が白くないのであれば白鳥では

ないというかもしれない。つまり、われわれが全体を見通す場合には、纏まりとして感じとっている見ている対象の全体が何であるか、よいか悪いか、おもしろいかつまづいかなどの判断は、対象の特質だけをただ数え上げるだけで決めていないのでないだろうか。ある特質に特に重さを与えてその価値付けされた選ばれた特徴の集合として対象を纏まりとしてみているに違いない。従って、その配慮された関心を持てる特徴が見て取れないと相手について判断が下せないであろう。

日常に起こる否定の形式は形式論理的な否定形ではない。矛盾と呼ばれるものは、日常的には対立といった方が当を得ているであろう。これは、変化を生むに足る否定である可能性はある。新たな規定性の生産であり得る。ここでは論理形式の議論ではないので、論理学を論じているのではない。ただ、われわれが日常で接する実践的な活動の存否や活動計画の改善策などを試みるときに、活動全体の評価を試みる。それは当然のことながら、われわれの活動は全て全体の纏まりとして行動することが前提であるからである。ある目的を持っていつも異なる手足の動かし方をして行動はその変化した手足の動きにあるのではなく、それを伴った行動全体に意味があるのである。

世界の把握について、このような纏まりとして理解された把握をわれわれは行っている。そこから世界が変化するという現実には、われわれが関心を持って見て取っている世界の内実でのわれわれの関心の度合いによって重み付けされている特質の変化であることになり、あるいは、重みをつけることの出来る新たな特質の付加によって変化することになるのである。

ただし、常に念頭に置かねばならないことは、ある特質だけに目を止めてそれだけで全てを決めてしまっても、それ故に他の特質が無視されるわけではなく、他の特質も全体としてあることが纏まるためには必要なことなのであり、無視できない。つまり、実践的な行動は纏まりとして全体行動であるのであって、一つの特徴だけが活動しているのではない。

そこから、「善い」という判断は決して一つのカテゴリーでは決まらないということも考える必要がある。同時に一つでもその要素が現れてくれば他の要素も曲がりなりにもともに現れてくるにちがいない。人間は自由で、主体性があり、責任と共感のころをもっていると考え。自由に重点を置いてそれに注目してその特質を伸ばすように人間が行動しても、必ず他の特質が伴われるのである。それをわざわざ無視するとすると、そのとき人間の全体の実存は消

えてしまうにちがいない。医療という体系は、身体的病気の除去だけではないと考えられるのはそのためであろう。

脳死の人は死者であるか。生きていることにその特徴があればその特徴は何であるか。その特徴の何がなくなれば死んだことになるのか。死は生きていることの反対概念なのだろうか。死の特徴が否定されれば直ちに生きていることになるのだろうか。さて、脳死とはいったい何であるのか。脳死という状態は生と死を決めるものであるのか。つまり世界性が変わるのであるか。これが脳死の問題である。

判断の偏りというのは人間の関心や配慮の方向によって生じるので、人間的ではあるけれども、それだからといってそれがそのほかの価値を低いものとする意味を持たない。受験戦争に勝ったとしても自分の本当の個性としての望みを全うできなかったり、人への思いやりを失っているようであるならば、それはおかしいことである。偏りというのは、重点の置き方に過ぎないのであって、全体のなかの一つの要素について関心の度合いを強めることに過ぎない。人が生活し、生きることは一つの特徴だけで生きているとは言えず、全体の纏まりとして人は生きているからである。この全体の纏まりを纏まりとして了解することがなければ、人間の実存の理解も世界の理解も生きるということにはほど遠い。世界了解や理解はそういう纏まりとしての直観的な全体に関わるのである。

偏った見方というのは、自分の関心を寄せる以外のことを押し殺し、無視することである。それが問題になるのは、人間の生はこの世界の纏まりのなかにあるのであって、そういうものとして活動しているから、人がわざわざ無視するのでなければ決して他の要素が働かなくなるようなことはなく、全体として生きる世界が世界として活動するのである。従って、自分の関心の置き所を変えれば世界は別の様相になってくるし、偏見的でなければ他の要素もいきいきと活動する世界として見えてくるものである。関心の置き所が変われば自分の世界性も変化する。つまり、世界性が変わるというのは自分自身も変化するということである。われわれの生きている世界はわれわれ自身を自分として含んだ世界だからである。従って、世界が変わるということは、自分が変わることであり得て、世界が変わることは自分もまたそれに巻き込まれることになるのである。

世界を全く自分と切り離してしまうということとはできなくはないが、人間の実存的条件としては寂しいことだと思ふ。

論理、判断、そして価値づけること

論理形式を決めたり、判断の形式を求めたりすることはできる。しかし、形式から何かが推論されたり、結果が出てきたとしてもそれは既に論理の実際の道筋や、判断の内容の道筋にあったことが、現れてくることに過ぎないといってよい。つまり、前もって了解されていることがかたちを変えて現れてくることに過ぎないであろう。それは数学形式に於いても同じである。対象となっている現象に対して、何に目を付けているかはそれに出会った人の視野で自分が関心を持った事象にその人が見いだしたことである。

ところで、判断は、自分の世界のなかで現実に自分に意味を持っていることであると見なすことであるとすれば、その妥当性は、自分の既にある構えと関係があって、そこから判断が生じるのだといえるから、判断がきっぱりとなされるという場合には、自分にとっての妥当性が自分の構えのなかで成立していることの表明であるというわけである。言いたいことをいっているのである。

判断における価値の重さを決めるのは、判断対象に対する自分の世界で感じる親密度あるいは、距離によって測れるのだろう。価値とはある種の距離感でもある。自分の世界あるいは、構えと十分に近くあるか、はっきりと自分の世界に位置づけられているかによって価値は大きくもなり小さくもなるだろう。簡潔に言えば自分と自分の視野に入ってきた現象との親密感が距離の実感である。

そこでも、先駆するものは自分の構えである。即ち、現存在の実存的な可能性へ自分が開示する現実の具体的な自分の世界という構えである。この構えには既に自分の関心と配慮の方向が具体的にあって、関わっている世界が自分の世界としてあって、従って、自分が判断できる出来事として他者も自分の構えのなかで了解されているから、自分の周りで起こる出来事についても判断の可能性は十分に準備されているといってよい。

唯、自分の世界のなかに飛び込んでくる新しい事実については、その事象の理解が直ぐに出来なかったり、事情が汲めなかったりして、判断まで行き着かない場合もある。それでも、直観的に何か問題があると思えば、直観的に問題だと思った対象を分析しようとする。自分に分かるように真実を知ろうとするであろう。その場合の真実とは、表面的な感覚的に分かることだけではなく、それに関わっている人たちの感じ方や考えにまで及ぶ必要があるに違いない。即ち、事件に関わる人々の内部世界にまで考

えが及ぶ。

論理が真実の推論であるとすれば、自分の世界性から語ることが自分の判断根拠を含めて伝わることである。つまり、語りの伝達である。判断根拠は自分のなかにある世界理解に基づいている。判断根拠が自分自身の考えではなくても、それをういて推論は出来る。それが可能なのは、人間が論理を展開すること自体が普遍的な表現形式だからであろう。自分自身の世界理解から語られる場合には、主観的真実と呼んでもよいかもしい。しかし、主観的ということが消極的な意味でとられて、単に個人的意見という退けられ方をするとするとこれはあまり正しくない。社会通則のような原理を根拠に推論することがいつも正しいとは限らない。従って、客観的ということに積極的な意味があるとするのは、人間の推論と論理の意味が人間の普遍的なあり方に同調しているというのであれば、主観性自体もほとんどその区別はないことになる。つまり、通則的な根拠が客観性の基礎であるということはある得ないで、むしろ、人間自身のあり方に沿っているかどうかの共通感覚が人の語りの文脈にあって、それを了解できるならば、その了解が論理の根拠になる。推論の根拠が人によって異なっても、それは当然のことであって、それこそ健全な議論が始まるきっかけである。

ところで、論理の対象となる事柄についてわれわれは、前もって既に何らかの直観的な印象や感じを掴んでいることが多く、それ故にそのことに関心や配慮が既に自分のなかに準備されている。そこからそのことについての分析が始まり、事実関係や真実の内容などを把握し、それについて判断を求めることになる。対象に対する印象や感じ方は、そのできごとの少なくとも自分に見えている全体に対して抱かれる直観であるけれども、その直観は大事であって、それがなければ関心も配慮も起こらないからである。

ことの真相や事実は自分が直接経験していない場合もある。そのことについての他者の印象を聞き取ることによってことを知るといことも多い。ことが事実か否か、あるいはそれについての判断が自分として受け入れられるかどうかというときに、ことを説明したり、語る語り方がしっかりしている必要がある。事実を事実として論証する場合には、その説明されていることが他の人にも検証できることが要請される。いわゆる検証可能性である。

ところが、語りというのは伝達されるのであるが、伝達されるのは事実だけではなく、事実についての判断としての理論と対象になっていることに対する

語る人の関わりの度合いや関心の深さ等も伝わるのである。単に検証可能である事実ということだけが伝達されるのではない。価値観も感じ方も一緒に伝えられる。自分が本当だと思っていない根拠で形式的に論理を立てて、ことを説明することは可能である。しかしながら、真実というものは、人の語りの場合には、その人の判断根拠に対する配慮の度合いが重要で、そうでなければ、語る人の世界の内容、その人の内部世界は見えないのである。価値観の世界までわれわれが気にかけるのであれば、それが見えてこないときには何も伝わっていないということになるだろう。

論理が意味を持つのは矛盾を排することを意味していると考えられている。但し矛盾というのは、よく考えてみれば、自分の世界と相容れないという判断が成立するときには、形式論理的矛盾ではなく意味的な矛盾、即ち価値対立ということが問題になるに違いない。真偽の判定は、概念の内包に含まれるか否かというよりは、概念によって現されている自分の世界観と対比せられて、正否の価値基準の問題になってくるのではないであろうか。

人が関心と配慮の方向に関わりを深めていく場合には、価値観として判断がなされているその判断の基準がその配慮の命題的な根拠をなしているのである。命題的というのは、語られる内容として表明されることである。

おわりに

「私」は世界内存在であるということは、自分を含めた自分の関心と配慮の及ぶ地平としての世界があるということである。それは決して平衡状態にも安定状態にもならない生きている世界であるので、自己実現という可能性の未来を含んでいる。

その世界は人間の世界であるので、人間の世界として持続して行くには自動機械のようにではなく、人間の価値判断力としての判断力から生まれる意図の力が世界のよい方向への持続をもたらすのであると考える。

福祉的社会の創出は自然法則的な発生ではなく、人間の価値的な判断がもたらす人々の意図によって持続可能な世界のことであるということになろうか。福祉的状态は、当然構造としての人間関係や構成に含まれる施設、政策的な連関をもつパートナー、地域的ネットワーク連関、など様々なものが纏まっている秩序的な組織とともに実現されるのであるが、その実現度は価値的な評価によっているので、「見えないもの」が見える形で表現されているわけである。「見えないもの」が見える形で実現されるのは、結局、見えない力としての人間の意図の力の持続性によるのであろう。コミットメント、奉仕、愛、ある場合には、責任感とか義務感、目的意識の持続、いろいろな力が分節して価値実現を試みるのである。

文 献

- 1) 滝浦静雄 (1990) 「自分」と「他人」をどうみるか—新しい哲学入門NHKブックス, 日本放送出版協会.
- 2) ハイデッガー M, 桑木 務訳 (1963) 存在と時間 (上・中・下), 岩波書店.
- 3) シュペーマン R, レーブ R, 山脇直司, 大橋容一郎, 朝広謙次郎訳 (1987) 進化論の基盤を問う—目的論の歴史と復権, 東海大学出版会.
- 4) 竹内外史 (1980) 直観主義的集合論. 紀伊国屋数学叢書20, 紀伊国屋書店.
- 5) Cohen M, Nagel T, Scanlon T (1981) *Medicine and Moral Philosophy*, Princeton Paperbacks.
- 6) Mahoney J (1984) *Bioethics and Belief* Sheed and Ward Ltd (London).
- 7) Perry J (editor) (1975) *Personal Identity*, University of California Press.
- 8) Hbermas J (1968) *Knowledge & Human Interests*, Polity Press.
- 9) ポパー KR, 大内義一, 森 博共訳 (1972) 科学的発見の論理 (上・下), 恒星社厚生閣.
- 10) 星野一正 (1981) 医療の倫理, 岩波書店.
- 11) 小田兼三, 竹内孝仁編 (1997) 医療福祉学の理論, 中央法規.
- 12) Jonas H (1984) *The Imperative of Responsibility — In Search of an Ethics for the Technological Age —*, The University of Chicago Press.

On I-self in Human Phenomena and Personal Capacity of Value Judgement

Makoto SEKIYA

(Accepted May 12, 1999)

Key words : I-SELF, WORLD OF HORIZON, CONCEPT OF GOOD, HUMAN PERSONAL JUDGEMENT

Abstract

What subsists (subsistere) in every personal act is called 'I-self'. It must not be confused with the ego (in a contemporary use) or the self awareness entity in personal activities. It is just the 'I-self' which appears among things and deeds as far as a human person is concerned. The manuscript is focussed on clarifying the 'I-self'.

The 'I-self' is associated with personal concerns and interests which look forward to the world open to him or her, that is, a person has his or her horizon which includes the 'I-self' in actual relations with other persons. Whatever stands as good values are created by the personal capacity of choice which directs the world toward the creation of well-being in human relations.

Personal strength of will determine his or her choice of values. The strength of will maintains regular norms and rules so that the well-being of the world endures, but not in the way that physical laws and rules work in the physical system.

The capacity to choose values joins with the capacity to judge what is valuable. Thus, personal will to choose and determine what is good is fundamental in human phenomena. In reality, a personal sense of commitment often survives the social system against all odds.

Correspondence to : Makoto SEKIYA

Department of Medical Social Work, Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Kawasaki Journal of Medical Welfare Vol.9, No.1, 1999 33-41)